

## 読み手を特定することが文章産出におよぼす効果<sup>1)</sup>

大 浦 理恵子<sup>2)</sup>

安 永 悟<sup>3)</sup>

### 要 約

本研究の目的は、読み手を特定することが、産出文章の質におよぼす効果を検討することであった。実験参加者は大学生110名であった。実験では、読み手の個人特性に関する情報を与える個人特定群、読み手の属するカテゴリー情報を与えるカテゴリー特定群、読み手情報を与えない統制群に道案内文の作成を求めた。その結果、個人特定群は統制群に比べて、目印の説明が丁寧で、相手を配慮した文章が書けることが明らかとなった。また、読み手情報が与えられなくても自発的に読み手を特定できる参加者も質の高い文章を産出できることが見いだされた。さらに、実験参加者を対象とした調査から、自発的に読み手を想定できる参加者は手紙文作成経験が多いことが判明した。これらの結果を読み手意識活動の活性化の観点から考察した。

キーワード：文章産出、読み手特定、教示、大学生、説明文

### 問 題

本研究では、読み手を特定することが文章の産出過程および産出文章の質におよぼす効果を検討する。

文章産出において、書き手が読み手を意識することが、産出された文章の構成や内容など文章の質を高めることが知られている。ここで書き手が「読み手を意識する」とは書き手の長期記憶にある「読み手に関する情報を抽出し、抽出した情報を踏まえて書く内容や文章表現を選択するという一連の活動（崎濱, 2003）」をさす（以後、読み手意識活動と呼ぶ）。

Cohen & Riel (1989) は、作文指導において読み手意識活動を活性化する指導の重要性を指摘した。文章産出をコミュニケーション過程とみなす彼らは、作文指導では具体的な読み手を意識させるべきであると主張している。この観点から学校教育における作文指導を検討した結果、学校教育における作文指導はコミュ

ニケーションの文脈を考慮していないと批判している。実際、試験として教師の評価を前提に文章を書く条件（学校条件）とインターネットを通して外国の生徒に紹介文を書く条件（現実条件）を比較したところ、学校条件よりも現実条件のほうが、教師の採点による総合評価が有意に高かった。また、学校条件と比較して、現実条件の作文は内容が豊かで、中心的なテーマがよりよく展開されており、構成がしっかりしているうえに、言葉の使い方も効果的であり、口語的表現や俗語などはほとんどみられない、という知見がえられた。

読み手意識活動の重要性は杉本（1987）においても示されている。彼は、英語文の推敲過程を観察し、英文作成の熟達者と非熟達者の文章産出過程の違いを検討した。その結果、熟達者は自発的に読み手を想定・分析し、読み手の立場にたって文章を吟味するという読み手意識活動が見られた。しかし、非熟達者にはそのような活動はみられなかった。同様の結果が

1) 本研究は第一著者が第二著者の指導のもと平成18年度に提出した修士論文の一部をまとめたものである。

2) 久留米大学大学院心理学研究科

3) 久留米大学文学部心理学科

Hayes & Flower (1986) や Ede (1984) においてもえられている。

上述の研究知見より、作文指導において読み手意識活動を活性化することが重要な役割を担っていることが示されているが、その具体的方法に関しては一貫した知見はえられていない。たとえば、佐藤・松島 (2001) は、教示で読み手を意識させる群と意識させない群を構成して産出された文章を比較検討している。読み手を意識させる教示は「読み手が正確に図形を記述できるように」であり、意識させない教示は「図形を正確に記述するように」であった。実験の結果、読み手を意識させると記述量が増え、短い文を重ねて文章を構成し、補足的な説明や、説明の説明を加えることが多いということが明らかになった。また、読み手を意識した文章は実際にわかりやすいと評価され、読み手が文章で説明された図形を実際に再現できる割合も高いことが示されている。この結果から、「読み手」という教示を与えるだけで読み手意識活動を活性化し、理解しやすい文章の作成に影響することが示されている。

しかし、前述の杉本 (1987) は非熟達者に対して「読み手のことを考えて書くように」と教示するだけでは、読み手意識活動は活性化されないことを見いだしている。そこで彼は、非熟達者に対して「ペットが嫌いな人に対してペットのことについて書く」という教示を与えて文章を作成させたところ、読み手意識活動が活発化した。同様に、杉本 (1991) は「反対する人を説得する」という教示を提示することによって、統制群と比較して文章の統括性や一貫性が高まることを示した。また、堀田 (1993) は、「批判的な他者」を意識させることにより、推敲過程において、書き手の思考内容と産出文章のズレを調整する「書き手としての訂正」と、読み手の反応を想定して行う「読み手としての訂正」の相互調整活動が活発になることを示した。

これらの研究知見から、単に「読み手」を意識させる教示よりも、読み手を想起しやすい属性情報を与えることにより、読み手意識活動が活性化され、産出文章の質が高まると考えられる。その際、前述の杉本 (1987)、杉本 (1991)、および、堀田 (1993) は、読み手の属性として「ペットが嫌いな人」「反対する人」「批判的な他者」といったカテゴリー情報を使用していることに注目したい。カテゴリー情報は読み手に関する情報を長期記憶から検索する際に具体的な手がかりとなり文章作成目的にそった読み手意識活動を活性

化できると考えられる。

ただし、カテゴリー情報を与えたとしても、その情報を有効に活用できなければ、文章作成において適切な読み手意識活動の活性化は期待できない。たとえば、岸・綿井 (1997) は読み手のカテゴリー情報を教示するだけでは産出された文章の質は影響を受けないという結果をえている。彼らは、「テニスを知らない人」に対してテニスゲームの進め方を説明する文章を、テニス経験者と未経験者に作成させた。その結果、経験者の作成した文章が未経験者の作成した文章に比べてわかりにくいと評価された。このことは「テニスを知らない人」というカテゴリー情報を教示として与えるだけでは、テニス経験者は読み手に分かりやすい文章を書くために適切な読み手意識活動を活性化できなかったことを示している。テニス未経験者は自分自身が「テニスを知らない人」であり、文章作成時に自分を意識しながら書くことができ、分かりやすい文章を作成できたと考えられる。この解釈を裏付けるように、実際に文章を読んだテニスを知らない読み手から質問を受けると、テニス経験者もわかりやすいと評価される文章を産出することができた。

この岸・綿井 (1997) の研究は、読み手意識活動を活性化させるために、読み手のカテゴリー情報を与えるだけでは不十分であり、読み手個人の具体的な情報を与えることが効果的であることを示唆している。つまり、テニス経験者に「テニスを知らない人」という読み手カテゴリーをあたえても、「テニスを知らない人」がテニスゲームに対して何をどの程度知っているのか、または知らないのかをイメージできなかったと考えられる。ところが、「テニスを知らない」読み手個人と対話することにより、読み手の知識状態に関する情報をえることができ、その情報を踏まえて文章を吟味する読み手意識活動が活発化したと解釈できる。

以上の研究知見より、読み手意識を活性化するためには、読み手のカテゴリー情報よりも、個人属性に関する情報を提示することが有効である。つまり、具体的な個人を特定できる情報を与えることにより、文章産出過程において、その個人の性格や知識内容などの個人特性にかかわる情報が活性化され、その個人特性に適した文章が作成されることが考えられる。そこで本研究では、読み手が属するカテゴリー情報を与える以上に、読み手個人を特定できる個人情報提示することによって、読み手意識活動が活性化され、産出文章の質が高まるとする仮説を検討する。

なお本研究では、実験課題として道案内文という説

明文の作成を用いた。道案内や料理の作り方、ゲームのやり方など手続き的知識を説明する機会は日常生活に数多く存在するが、学校教育で手続き的知識の説明の指導は体系的にはおこなわれていない(中村・岸, 1996)。本研究では説明文の作成指導に関する基礎的資料をえることも意図して、研究課題として説明文を採用した。

## 方 法

**実験計画** 文章産出時に、読み手個人の属性情報をあたる個人特定群、読み手のカテゴリー情報をあたるカテゴリー特定群、読み手のカテゴリー情報も個人属性に関する情報も与えない統制群の3群を設けた。

**実験参加者** 参加者はK大学2年生、110名(男性32名、女性77名、不明1名、平均年齢:20.0歳)であった。彼らはランダムに個人特定群42名、カテゴリー特定群35名、統制群33名に分けられた。

**実験課題** 課題は、実験参加者が熟知した大学キャンパスへの入り口(東門)から校舎(500号館)までの道案内を文章で説明することであった。500号館は東門からみて西側に位置し、キャンパスのほぼ中央部にある。東門から西に向かって延びる道を直進して、正面に見える階段を登ると見えてくる建物(図書館)の背後にあり、図書館の周りを右方向に進んでも、左方向に進んでもたどり着く位置にある。

**実験操作** 教示によって実験操作をおこなった。まず、統制群には「東門から、500号館までの行き方について、文章で説明してください」という教示を与えた。カテゴリー特定群には統制群の教示文に「皆さんに書いていただいた文章は、初めて大学に来られる先生に読んでいただきます」という読み手のカテゴリー情報を加えた。個人特定群では、カテゴリー特定群の教示に加え、読み手の個人情報として、①性別(男性)、②年齢(70歳)、③住所(大学の所在地とは異なる市の具体名)、④出身(大学の所在地とは異なる県の具体名)、⑤個人特性(方向音痴)、⑥関係(書き手が受講する科目の非常勤講師)という情報を追加した。

**実験材料** ① 教示文:群ごとに上記の教示内容を文章で提示した。

② K大学の構内地図:K大学のキャンパス全体の地図で、目的地である校舎と出発地である門には印をつけた。

③ 原稿用紙:20字×20行の400字詰め原稿用紙を使用した。なお、下書き・メモ用としてA4版用紙1枚を準備した。

④ 読み手意識に関する質問紙:この質問紙では文章産出時に読み手を意識した程度(5件法)を尋ねた。なお、統制群に対しては読み手を意識したのであれば、その対象を具体的に記述するように求めた。

**実験手続き** 実験は2006年4月に集団で一斉に実施した。参加者に教示文、構内地図、下書き用の白紙、原稿用紙の4枚を配布し、課題について説明した。その際、配布した教示文をよく読むこと、必要であれば構内地図を参考にしてよいこと、道案内文は配布した原稿用紙に縦書きで書くこと、白紙は下書きとして自由に使用してよいことを伝えた。

文章の産出には30分間の時間制限を設けたが、文字数は制限しなかった。30分が経過したところで、すべての配布用紙を回収した。その後、質問紙を配布して回答を求めた。

## 結 果

### 1. 産出文章の分析

以下の分析では、文章が完成していなかった参加者1名を除く109名の文章を検討対象とした。

#### (1) 文章内容

産出された文章内容を検討したところ、道順の説明に直接関係した道順情報、道順の説明に関連した関連情報、および関連しない無関連情報に区別できた。そのうち、関連情報と無関連情報として分類された内容をカテゴリーごとにまとめ、各カテゴリーに言及した人数を群ごとに整理したのが表1と表2である。

表1から読み取れるように、個人特定群が他の2群に比べて、無関連情報に言及する参加者が多くいた。カテゴリー特定群にも少数ながら認められたが、統制群には認められなかった。同様に、関連情報に言及した参加者も、他の2群に比べて個人特定群に多く認められた。

#### (2) 文字数

実験条件3群において産出された文章の総文字数を比較した。表3に示すデータに基づき1要因分散分析をおこなった結果、主効果が認められた( $F_{(2,107)} = 6.40, p < .01$ )。そこでTukey法による下位検定をおこなった結果、個人特定群の文字数が統制群に比べて有意に多かった( $HSD = 45.8, p < .05$ )。

表1および表2より、個人特定群は道順情報以外の関連情報や無関連情報に多く言及したため、産出文章の総文字数が統制群よりも多くなった可能性が考えられる。そこで、関連情報と無関連情報を文単位で抜き出し、道順情報のみの文字数を算出した(表3)。こ

表1 無関連情報の下位カテゴリーと各群ごとの言及者数 (延べ人数)

無関連情報	個人特定群	カテゴリー 特定群	統制群
・書き手の自己紹介	4	1	0
・K大学へようこそ	2	1	0
・よろしく願います	2	0	0
・お気をつけて	2	0	0
・道順以外の大学情報	2	1	0
・お疲れ様です	0	2	0
・授業に対するコメント	1	0	0
・お会いできるのを楽しみにしています	1	0	0
・失礼します	1	0	0

表2 関連情報の下位カテゴリーと各群における使用者数 (延べ人数)

道順関連情報	個人特定群	カテゴリー 特定群	統制群
・分からない場合の対処法	8	1	0
・文章内容の説明	6	1	2
・別ルートの手呈示	4	4	2
・その他	1	1	0

表3 各群の、産出文章の文字数、内容的側面の違い

条件		全体の 文字数	道順情報 の文字数	内容的側面		修辭的側面	
				目印数	行動数	目印修 飾語数	行動修 飾語数
個人特定群 (N=42)	平均	255	225	9.26	7.26	18.71	5.57
	S.D.	81.12	75.56	3.04	2.72	8.96	2.80
カテゴリー群 (N=34)	平均	216	205	9.47	7.76	16.03	5.53
	S.D.	71.82	67.66	3.56	2.85	7.88	2.83
統制群 (N=33)	平均	189	176	9.48	7.45	13.58	5.73
	S.D.	85.36	69.32	3.76	3.11	8.67	3.16

のデータに基づき1要因分散分析を試みた結果、群の主効果が有意であった ( $F_{(2,106)}=4.29, p<.05$ )。Tukey法による下位検定の結果、個人特定群が統制群より文字数が有意に多かった ( $HSD=41.0, p<.05$ )。これにより産出された説明文の文字数の差は、説明文全体に加え、道順情報においても差異があることが明らかとなった。

### (3) 道順情報の内容

#### ①目印と行動

おもな道順情報として、目的地にたどりつくための行動と目印の2つが考えられる。そこで産出された道案内文に含まれる行動と目印への言及頻度を群ごとに比較した。その際、判定基準として大浦(2007)をもちいた。

判定結果を表3の「内容的側面」に示す。このデータに基づき1要因分散分析を行ったが、有意な差は見られなかった(行動,  $F_{(2,106)}=0.27, n.s.$ ; 目印,  $F_{(2,106)}=0.04, n.s.$ )。読み手を特定するか否かによって、道案内で示される行動と目印の数には差異は認められなかった。

## ②修飾語

道順情報の文字数は個人特定群が統制群よりも多かったが、言及された行動と目印の数には差異がなかった。そこで、道順情報を対象として、修辭的側面の違いを分析する。例えば、「階段を上る」という1つの目印と、1つの行動について述べる場合でも、個人特定群は「白くて長い階段を上る」と階段について詳しく修飾しているため、文章が他の群よりも長くなった可能性が考えられる。

この可能性を検討するために、道順情報の文章から、目印や行動を修飾、説明している語を文節単位で抽出し、群ごとに整理した。その結果を表3の「修辭的側面」に示す。このデータに基づき1要因の分散分析をおこなったところ、目印の修飾語数において主効果は認められた( $F_{(2,106)}=3.28, p<.05$ )。Tukey法による下位検定をおこなった結果、個人特定群の修飾語数が統制群に比べて有意に多かった( $HSD=4.92, p<.05$ )。行動修飾語数については、有意な差は見られなかった( $F_{(2,106)}=0.04, n.s.$ )。道順を説明する文章において、個人特定群は統制群よりも、目印の情報について多くの修飾語を使用し、より丁寧に詳しく説明していたこ

とが示された。これが個人特定群の道順情報の文字数が統制群よりも多かった原因と考えられる。

## 2. 文章の評定

次に、読み手を特定することが産出文章の評定に及ぼす影響を検討した。実験参加者により産出された文章を、中村・岸(1996)の評定手続きを参考に評定した。評定者はK大学の大学院生3名であり、K大学の構内および課題対象となった道順について熟知していた。評定者には、ワープロで清書した全109の道案内文を、以下にあげた観点に基づき個別に評定させた(5件法)。その際、評定者には説明文の書き手、および読み手についての情報は与えずに評定させた。道案内文は評定者ごとにランダムに並べ替えて提示した。評定に時間制限は設けなかった。

- ① 正確さ：説明されている内容は正確なものになっているか。
- ② わかりやすさ：文章としてわかりやすいものになっているか。
- ③ 読み手への配慮：読み手のことも考慮した表現をしているか。
- ④ 総合点：最後に、上記の3点を考慮したうえで文章全体を10点満点で採点させ、総合点とした。

以上の評定からえられた、「分かりやすさ」「正確さ」「読み手への配慮」の3つの評定値と「総合点」の群ごとの平均値と標準偏差を表4に示す。各評定値の群による差を検討するため1要因分散分析をおこなった。その結果、「読み手への配慮」が有意であった( $F_{(2,106)}$ )

表4 産出文章の評定値の結果

群		正確さ	わかりやすさ	読み手への配慮	総合点
個人特定群	平均	3.86	3.76	3.68	6.87
	(N=42) S.D.	0.55	0.49	0.70	1.07
カテゴリ一群	平均	3.82	3.62	3.35	6.53
	(N=34) S.D.	0.44	0.67	0.72	0.99
統制群	平均	3.84	3.56	3.17	6.33
	(N=33) S.D.	0.61	0.57	0.78	1.19
自発的カテゴリ一群	平均	3.99	3.57	3.36	6.61
	(N=24) S.D.	0.39	0.54	0.66	0.96
無自発統制群	平均	3.44	3.52	2.67	5.59
	(N=9) S.D.	0.86	0.63	0.86	1.40

=4.59,  $p<.05$ )。Tukey 法による下位検定の結果、個人特定群が統制群より有意に高かった ( $HSD=0.42$ ,  $p<.05$ )。しかし、「正確さ」「わかりやすさ」、および「総合点」においては有意な差は見られなかった (正確さ,  $F_{(2,106)}=0.03$ ,  $n.s.$ ; わかりやすさ,  $F_{(2,106)}=1.26$ ,  $n.s.$ ; 総合点,  $F_{(2,106)}=2.27$ ,  $n.s.$ )。

### 3. 統制群における読み手意識の差

佐藤・松島 (2001) では、教示で読み手を意識させなくても、読み手を自発的に意識して文章を作成する者がいることを報告している。本実験の統制群においても、その可能性がある。そこで統制群を対象とした質問紙を手がかりに、統制群の参加者が具体的なカテゴリでないしは個人を自発的に想起しながら道案内文を書いていたか否かを分析した。

文章産出時の読み手意識を測る質問項目 (5 件法) に対して、「4: 読み手を意識した」、または「5: 大変意識した」と回答し、読み手についての自由記述があった人数を集計した。その結果、統制群34名中24名が自発的に読み手を意識しながら道案内文を書いていたことが判明した。想起した内容は、「初めて大学にきた人 (16名)」「新入生 (3名)」などであった。ただし、個人を特定した参加者はいなかった。

そこで、統制群のうち読み手のカテゴリを意識して文章を産出した参加者を「自発的カテゴリ特定群」、読み手を意識しなかった参加者を「無自発統制群」として、両者を比較検討した。両群の「分かりやすさ」「正確さ」「読み手への配慮」「総合点」の平均値と標準偏差を表4に示す。両群の差を評定項目ごとに  $t$  検定で検討したところ、「正確さ ( $t_{(31)}=2.40$ ,  $p<.05$ )」「読み手への配慮 ( $t_{(31)}=2.39$ ,  $p<.05$ )」「総合点 ( $t_{(31)}=2.30$ ,  $p<.05$ )」において、自発的カテゴリ特定群の得点が無自発統制群よりも有意に高かった。ただし、「わかりやすさ ( $t_{(31)}=0.22$ ,  $n.s.$ )」において差異は認められなかった。

また、文字数、修飾語数に関しては自発的カテゴリ特定群と無自発統制群との間には差異は認められなかった。

### 4. 自発的カテゴリ特定群を考慮した分析

統制群の分析結果より、自発的カテゴリ特定群の存在が明らかとなり、無自発統制群よりも質の高い説明文を作成していることが明らかとなった。そこで、個人特定群、カテゴリ特定群、自発的カテゴリ特定群、無自発統制群の4群間で文章の評定項目 (表

4) について、再度比較検討をおこなった。その結果、「読み手への配慮」に有意差が見られた ( $F_{(3,105)}=5.19$ ,  $p<.01$ )。Tukey 法による下位検定の結果、個人特定群、カテゴリ特定群、自発的カテゴリ特定群が無自発統制群より有意に高かった ( $HSD=0.61$ ,  $p<.05$ )。また、「総合点」にも有意な差が見られた ( $F_{(3,105)}=3.54$ ,  $p<.05$ )。下位検定の結果、個人特定群、カテゴリ特定群、自発的カテゴリ特定群が無自発統制群より有意に高かった ( $HSD=0.90$ ,  $p<.05$ )。さらに、「正確さ」に有意な傾向が見られた ( $F_{(3,105)}=2.27$ ,  $p<.10$ ) が、「わかりやすさ」には有意差は認められなかった ( $F_{(3,105)}=1.26$ ,  $n.s.$ )。

## 考 察

実験の目的は、読み手個人を特定できる個人情報提示することによって、読み手のカテゴリを特定する以上に、読み手意識活動が活性化され、産出文章の質が高まるという仮説を検討することであった。

まず、産出された文章の質を評定した結果、「読み手への配慮」の点に関して、個人特定群が統制群よりも高い評価をえていた。しかし、カテゴリ特定群と統制群との間には明確な差異は認められなかった。次に、道案内文で使用された修飾語を検討したところ、個人特定群は目印を述べる時、統制群よりも多くの修飾語を使って説明していることがわかった。この点に関してカテゴリ特定群と統制群との間には差異は見いだされなかった。さらに、個人特定群は道案内文に直接関係しない情報を数多く含めていた。その内容は、書き手の自己紹介や挨拶などに加えて、「自分も講義を受講する」など、読み手との関係性に関する情報を踏まえた内容が見られた。このような情報はカテゴリ特定群にも若干認められるが、個人特定群において頻発していた。

このように、統制群との比較から、産出された文章の質はカテゴリ特定群よりも個人特定群の方が高いと判断され、本実験の仮説は支持されている。ただし、いずれの結果においても個人特定群とカテゴリ特定群との間には明確な差異は認められなかったことから、本実験の仮説は支持される方向にあったが、断定するまでには至らなかったといえる。

文章の質に関して、「読み手への配慮」には仮説に沿った結果がえられたが、「正確さ」「わかりやすさ」「総合点」の評定値については、実験条件間で有意な差は見られなかった。その理由として、道案内の課題として選定したルートが単純であり、道案内文の「正

確さ」や「わかりやすさ」に差異がでにくく、「総合点」にも差異が現れにくい課題内容であったことが影響していると考えられる。より複雑なルートの説明を課題とすれば、仮説を支持する結果がえられる可能性が高いと判断できる。今後の検討課題としたい。

ところで、統制群の分析結果から、読み手を特定する教示を与えなくても、読み手がどのようなカテゴリーに含まれるかを自発的にイメージしながら道案内文を作成した参加者がいることが明らかとなった。これらの参加者（自発的カテゴリー特定群）を考慮した分析をおこなったところ、読み手を考慮しなかった参加者（無自発統制群）と比べて、「読み手への配慮」がなされていると評定され、「総合点」が高いという文章評価がえられた。この知見から、質の高い文章を作成するためには、書き手が読み手意識活動を活性化することが重要であるという、本研究の前提条件の妥当性が再度確かめられたといえる。

加えて、自発的カテゴリー特定群が産出した文章の質は個人特定群やカテゴリー特定群の文章の質と大きな差異は認められていない。個人特定群とカテゴリー特定群にも、教示が与えられなければ読み手を意識することができない参加者も含まれていたはずであり、そういう書き手に対して読み手を意識させる教示が有効であることが確認されたといえる。

ただし、自発的カテゴリー特定群、カテゴリー特定群と個人特定群の間には明確な差異は認められなかった。この点に関しては、統制群でおこなった分析と同様、教示文から同じ情報をえても、その情報を手がかりにどのような内容の読み手意識活動をどの程度活性化できたかという視点からの検討が必要になると考える。たとえば、個人特定群に与えた個人の特性情報が道案内文の作成にどれほど有効であったか、さらにはカテゴリー特定群に与えたカテゴリー情報を手がかりに参加者が実際どのような読み手を意識しながら道案内文を作成していたかなど、実験条件ごとに、読み手に対する書き手の認知内容の再吟味が必要となる。今後の検討課題としたい。

### 追加調査

本実験の統制群の結果から、読み手の情報が与えられない場合でも、自発的に読み手を想定して文章を作成できる者がおり、読み手を想定することで文章の質が高まることが確かめられた。この結果は、佐藤・松島（2001）の知見とも一貫しており、文章の質を決定する重要な要因と考えられる。

そこで道案内文を作成する際、書き手が読み手を自発的に想定できるか否かは、書き手が読み手を想定した文章を書いた過去経験に依存するという仮説を検討するために追加調査をおこなった。本実験では手紙文の作成経験に注目した。手紙文は特定の個人を対象に書かれる文章であり、手紙文を書いた経験が多いほど、書き手は読み手を自発的に意識し、質の高い道案内文が書けると期待できる。この点を確かめるために、実験参加者に改めて手紙の作成経験を問うアンケートを実施し、分析で用いた4群（個人特定群、カテゴリー特定群、自発的カテゴリー特定群、無自発統制群）との関係を検討した。仮説は以下の通りである。

### 仮説

- (1) 読み手を特定する教示を与えない統制群では、手紙作成経験が多い者は少ない者に比べて、産出文章の質が高い。
- (2) 手紙作成経験が少ない者でも、読み手を教示で特定すると質の高い文章が作成できる。
- (3) 自発的カテゴリー群は無自発統制群に比べて、手紙作成経験者が多い。

## 方 法

### 材料

平（1995）を参考に、手紙作成経験について問う質問紙を作成した。その内容は以下の通りである。

**手紙作成経験** 特定の相手に宛てた手紙を月に平均何通書いていたかについて、小学校、中学校、高校、大学の時期ごとに数字で回答させた。ここでいう手紙には、封書とハガキといった正規の郵便物と、メモ用紙などに書いて直接渡す手紙文も含んだ。ただし、年賀状や暑中見舞いなどの定型的な時候の挨拶としてのハガキは除外した。

**対象者** 実験参加者110名を対象に実施し、そのうち100名のデータを回収することができた（男性：27名、女性：72名、不明：1名、平均年齢：20.0歳）。個人特定群42名、カテゴリー特定群28名、統制群30名であった。統制群のうち、自発的カテゴリー特定群は22名、無自発統制群は8名であった。

**手続き** 2006年6月に集団で一斉に調査した。

## 結果と考察

### 1. 手紙作成経験の効果

小学校から大学までの全期間を通して、一月平均で5通以下の手紙を作成していた57名を手紙作成経験少群、それを超える手紙を書いていた43名を手紙作成経

験多群とした。そのうえで、表5に示すように3（実験条件：個人特定群・カテゴリー特定群・統制群）×2（手紙作成経験：多・少）の6群ごとにデータを整理した。

仮説(1)と(2)を検討するために、表5のデータに基づき評定項目ごとに、3（実験条件：個人特定・カテゴリー特定・統制）×2（作成経験：多・少）の2要因分散分析を試みた。その結果、「読み手への配慮」の項目において、実験条件×作成経験の交互作用が有意であった（ $F_{(2,94)}=5.86, p<.01$ ）。下位検定の結果、個人特定群とカテゴリー特定群は手紙作成経験の多少によって評定値に差異は認められないが、統制群においては手紙作成経験が多い経験多群が経験少群よりも有意に高い評定値を示していた（ $F_{(1,94)}=12.32, p<.01$ ）。また、手紙の作成経験が少ない条件において単純主効果が見られた（ $F_{(2,94)}=6.47, p<.01$ ）。多重比較を行った結果、個人特定-経験少群、カテゴリー特

定-経験少群の評定値が、統制-経験少群よりも有意に高かった（ $HSD=0.56, p<.05$ ）。手紙作成経験が多い条件でも単純主効果（ $F_{(2,94)}=3.68, p<.01$ ）が認められたが、多重比較の結果、群間に明確な差異は認められなかった（ $HSD=0.63, n.s.$ ）。

総合点においても交互作用が有意であった（ $F_{(2,94)}=3.32, p<.05$ ）。下位検定の結果、統制条件においてのみ経験多群の評定値が経験少群よりも有意に高かった（ $F_{(1,94)}=10.54, p<.01$ ）。また、手紙作成経験少条件においても実験群間で有意な差が見られた（ $F_{(2,94)}=3.58, p<.05$ ）。Tukey法による多重比較をおこなった結果、個人特定群が統制群よりも有意に高かった（ $HSD=0.83, p<.05$ ）。手紙作成経験多条件においては群間に有意な差はみられなかった。

以上の結果は仮説(1)と(2)を支持するものである。

次に仮説(3)を検討するために、自発的カテゴリー群と無自発統制群に含まれる手紙作成経験の多い参加

表5 実験群別にみた手紙の作成経験が文章の評定結果におよぼす効果

実験条件	手紙作成 経験	人数	評定項目				
			平均	正確さ	わかり やすさ	読み手 への配 慮	総合点
個人特定	経験多	26	平均	3.90	3.69	3.71	6.92
			S.D.	0.54	0.56	0.70	1.06
	経験少	16	平均	3.83	3.81	3.67	6.83
			S.D.	0.56	0.44	0.70	1.08
カテゴリー特定	経験多	15	平均	3.74	3.67	3.10	6.41
			S.D.	0.40	0.52	0.77	0.96
	経験少	13	平均	3.73	3.51	3.40	6.42
			S.D.	0.43	0.70	0.59	0.87
統制	経験多	16	平均	4.10	3.79	3.67	7.05
			S.D.	0.39	0.45	0.42	0.76
	経験少	14	平均	3.65	3.50	2.79	5.85
			S.D.	0.66	0.49	0.81	1.15
自発的カテ ゴ リ特定群	経験多	13	平均	4.13	3.79	3.64	7.05
			S.D.	0.38	0.46	0.42	0.79
	経験少	9	平均	3.74	3.33	2.96	6.04
			S.D.	0.31	0.50	0.78	0.90
無自発統制群	経験多	1	平均	3.67	3.67	4.00	7.00
			S.D.	0.00	0.00	0.00	0.00
	経験少	7	平均	3.52	3.71	2.57	5.62
			S.D.	0.92	0.37	0.79	1.37



者と少ない参加者の人数を算出した(表5)。このデータに基づきフィッシャーの直接確立計算をおこない、各群の人数に偏りがあるか否かを検討したところ、有意であった( $p=0.039$ )。自発的カテゴリー特定群の方が無自発統制群より手紙作成を多く経験した者の人数が多いことが明らかになり、仮説(3)は支持された。

### 総合考察

本研究の目的は、読み手を特定することが文章産出過程および産出文章の質におよぼす影響を検討することであった。

本実験では、読み手のカテゴリー情報を与える以上に、個人を特定できる個人情報をもっと提示することにより、読み手情報を与えない場合と比較して、読み手意識活動が活性化されやすく、質の高い文章が産出される可能性が示された。また、読み手情報を与えない場合でも自発的に読み手を想定できる者は質の高い文章を作成することができた。追加調査より、読み手を自発的に想定できる人は過去において読み手を特定した文章(たとえば手紙文)を作成した経験が多いということも明らかになった。

本研究でえられた知見より、作文指導においては読み手個人の特性までも意識することを促す教示を与えることにより、課題に適切な読み手意識活動を活性化させ、質の高い文章を産出できることが確認されたといえよう。

読み手がどのような人物であるか、どのように自分の文章を読むのかという事を考慮し、読み手の視点に立った文章を産出できることは、電子メールや携帯メールなど、文書によるコミュニケーションを多用する現在の社会では、必要不可欠なスキルであり、向上のための訓練が必要である。今回えられた知見を応用し、読み手を特定する教示を与えて文章を作成する訓練を積み重ねることで、文章作成能力の向上を期待することもできる。

今後は、読み手のどのような情報を特定することにより、産出文章のどの側面がどのように改善されるのか、読み手情報の質と産出文章の質との関係を詳細に検討する必要がある。産出文章に影響すると考えられる読み手情報として、年齢、職業、性格など読み手の属性情報、何のために読むか、どのような視点で読むかというような読む目的に関する情報、話題に関する知識についての情報、話題に関する意見や感想についての情報などが考えられる。これらの情報がおよぼす

影響を体系的に検討することは、文章産出スキルの向上のために効果的な介入法を考案する上で重要である。

### 引用文献

- Cohen, M., & Riel, M. (1989). The Effect of Distant Audience on Student's Writing. *American Educational Research Journal*, 26(2), 149-159.
- Ede, L. (1984). Audience: An introduction to research. *College Composition and Communication*, 35, 155-171.
- John R. Hayes & Linda S. Flower (1986). Writing Research and the Writer. *American Psychologist*, 41(10), 1106-1113.
- 堀田朱美 (1993). 文章の産出過程における書き手の意識に及ぼす批判的意見の影響. *教育心理学研究*, 41(4), 378-387.
- 岸学・綿井雅康 (1997). 手続き的知識の説明文を書く技能の様相について. *日本教育工学会論文誌*, 21(2), 119-128.
- 中村光伴・岸学 (1996). 児童における手続き的内容の説明文産出技能の様相. *東京学芸大学紀要 第一部門*, 47, 39-46.
- 大浦理恵子 (2007). 読み手を意識することが文章産出におよぼす効果. 久留米大学大学院心理学研究科18年度修士論文.
- 崎濱秀行 (2003). 読み手に関する情報の違いが文章産出プロセスや産出文章のおよぼす影響について. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学*, 50, 207-212.
- 崎濱秀行 (2003). 書き手のメタ認知的知識やメタ認知的活動が産出文章に及ぼす影響について. *日本教育工学雑誌*, 27(2), 105-115.
- 佐藤浩一・松島一利 (2001). 読み手を意識することが説明文の産出に及ぼす影響. *日本教育心理学会第43回総会発表論文集*, 67.
- 杉本明子 (1991). 意見文産出における内省を促す課題状況と説得スキーマ. *教育心理学研究*, 39, 153-162.
- 杉本卓 (1987). 文章産出における読み手意識・機能的状況の役割—英語文産出過程の研究から—.*認知過程研究*, 1, 1-15.
- 平直樹 (1995). 物語作成課題に基づく作文能力評価の分析. *教育心理学研究*, 43, 134-1.

## Effects of providing information about target audience on writing production

RIEKO OURA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

SATORU YASUNAGA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

### Summary

This research sought to determine whether knowing specific information about the target audience, influences the quality of writing produced. 110 university students participated in the experiment. In the experiment, the students were asked to provide written directions to a certain place in three conditions, one where personal traits regarding the target audience was given, one where the target audience was categorized in certain ways and one where no information whatsoever regarding the target audience was provided, i.e., the control condition. The results of the experiment indicated that in comparisons between the first and last situations (personal traits versus control), the descriptions regarding landmarks were more detailed and showed that the writers took the target audience's point of view into consideration. Additionally, some participants naturally determined audiences on their own and produced descriptions of high quality even though they had received no information regarding target audiences. Furthermore, in a study of the participants in the experiment, it was revealed that many of the participants who naturally determined their audiences were students who had had experience in constructing letters. These results are discussed from the point of view of the activation of audience-awareness.

**Key words:** writing production, determine target audience, instructions, university students, written instructions